

- 島内各地に、昔から伝わる祭りや行事が多い。
- 豊富な海、山の産物を使った独特の郷土料理がある。
- 歴史文化遺跡、渡来仏、大陸系動植物など、文化財は、質量ともに豊富である。
- 国指定文化財 25 件、県指定文化財 41 件、市指定文化財 123 件である。

第1節 対馬の民俗

1. 年中行事

対馬各地区では、昔から今に伝えられている祭りや行事がある。祭りとは、神様の力によって生活を守ってもらおうとする儀式や祖先の霊をなぐさめるためのものであり、どれも生活の無事や豊かな収穫を祈って行われるものである。

また、昔から、毎年決まった時期に生活の折り目や区切りとして、さまざまな行事が行われてきており、人々の生活と密接に結びついている。

第2-1表に、年中行事のうち、いくつかを紹介する。

第2-1表 対馬の年中行事

旧暦	行事	地区	内 容
1月3日	サンゾーロー祭	厳原町豆敷	その年の吉凶を亀卜（亀の甲を焼いて占う）により行う。占者は、岩佐家が世襲する。
5日	畑 祭 り	全 島	畑に御幣やユズリハを立て、米と水を供え、日の出を向いて豊作を祈る。
10日	赤米頭受け (あかごめとう)	厳原町豆敷	多久頭魂神社の神田で頭仲間の輪番制により耕作し、前年の頭（当番）の家から次の年の頭へ米俵を移す。
15日	15日正月 (小正月)	全 島	もどり正月とも言われ、各地で種々の行事を行う。
16日	山の神祭	全 島 (厳原町内山)	山で働く人たちが山の神に安全を祈願する。正月、5月、9月の年3回行う。弓で的を射って、魔払いをする。(弓射祭)
23日	二十三夜待	全 島	月待ちとも言われ、多数集まって月の出を祭る行事。
25日	弓 射 り	美津島町大山	神主が矢と的を祝詞で清めたあと、2～7歳までの長男2名が、各3本ずつ矢を射る。射終わった弓矢と的は、八幡神社に奉納し、

旧暦	行事	地区	内 容
(新) 2月9日	百 手 祭 り	美津島町小船越	参列者で供物をいただく。 阿麻氏留(あまてる)神社で江戸時代から続いており、弓矢が的に当たる具合によって、その年の吉凶や農作物の出来具合を占う行事。
3月3日 4日 21日	花 散 ら 見 花 散 ら し 瀬 ま つ り	全 島 豊玉町廻 豊玉町・峰町の 西海岸地区	山や磯に出かけて遊ぶ。 3月15～19日の初磯後の祭
6月1日 6月上旬	厄 払 い や く ま 祭	全 島 全 島	厄年の人が厄を落とすために行う。 新麦を初穂として神にささげ、麦甘酒、麦だんごを供えて、麦に収穫感謝を祝う。 女達がネムの木の枝を海に流す。夏の病魔を追う。
15日	ねぶり流し	厳原町久根田舎	ヤクマ様の夜に踊り子や芝居の役割について話し合い、1日から稽古を始める。「スガタメ」とも言う。
7月1日	踊りならし	厳原町阿連	
13～17日 (新) 7月24日	盆 踊 り 地 蔵 盆	全 島 厳 原 町	地蔵様の顔に化粧をし、よだれかけも新しく取り替え、だんごや花を供え、子供の健やかな成長を祈る。子供の祭。 集落の10歳以上の人々が神社に集まり、集落の人数分だけはしを作り、安全を祈願する。
8月1日 1日	和多都美神社大祭 ほ こ 祭	豊 玉 町 美津島町大船越	
5日 15日	木坂海神神社大祭 厳原八幡宮大祭	峰 町 木 坂 厳 原 町	
9月13日 9月末	住吉神社大祭 オデフネ	美津島町鶏知 全 島	
11月1日	オイリマセ	全 島	神無月には神々が出雲にお立ちになるという信仰に基づくもの。出発の日をオデフネ、お帰りの日をオイリマセという。
10月 (新) 11月7日 9日 (新) 11月12日	亥 の 子 山 本 神 社 祭 オヒデリ様 小茂田浜神社祭	全 島 美津島町今里 厳原町阿連 厳原町小茂田	10月の亥の日に行う。子供達が祝い唄をうたいながら各家をまわる。 オヒデリ様(女神)を本山に奉送する祭。 元寇で討死した宗資国以下将兵の霊を弔う。

(「新対馬島誌」及び「対馬(対馬観光物産協会)」を参考に作成。)

2. 食文化

対馬では、祝い事など季節の変化に応じて食する郷土料理がある。これは、先人が自然の恵みを大切にし、心をこめて料理してきたことによって現在に伝えられた食文化である。

(1) 春^{しゅんかん}酢料理

えびと木の芽を主とした春の季節に使う料理で、初節句、初のぼり等祝いの席に用いられた。えび、干しめ(干しワカメ)のしん、干しいたけ、たけのこ、ふき、わらび、はんぺん、だし昆布、木の芽、花かつおを用いる。

(2) 湯煮鯛 (弓鯛)

昔、戦場に出る時そうめんは命を長くし、鯛はめでたいということの意味して作ったといわれ、主に春から夏に食される。鯛、だしこぶ、花かつお、そうめんを用い、鯛を浮かすようにそうめんを下に敷き、鯛のまわりに波のように盛り付ける。

(3) 六兵衛

農繁期にエネルギー補強食として食された。さつまいもから作られたせんだんごを水にひたした後、六兵衛せぎと呼ばれる器具で、めん状にしたものをゆで、汁の中に入れて食する。

(4) うずみ飯

木枯らしが吹く寒い時期に作られた。おすしでは冷たく感じられるころ、おすしに代わるもので、器もご飯も温かくして食する。しいたけ、ごぼう、かまぼこ、せり、こんにゃく、金糸卵等を用いる。

(5) いりやき

対馬で最も代表的なもので、寄せ鍋に似ている。鍋に湯を入れて魚又はかしわを煮立たせ、しょうゆ、砂糖、酒、塩などで味をつけ、次々に野菜を入れ、その後、そばやそうめんも入れる。

(6) その他

石焼き、あえませなます、いりなますなど、祝い事の時に用いられる対州流祝膳や仏事に用いられる献立などがある。

※参考：「郷土料理つしま」（長崎県栄養士会对馬支部発行）

3. 方言

全国各地域にはさまざまな方言があるが、対馬にも、豊かで味わいのある言葉が古くから伝えられている。

対馬の方言のなかから、今でもよく聞かれることばを紹介する。

アッポスル（遊ぶ）

アラカマシイ（荒っぽい）

イッチャケル（容器の中身をこぼす）

- ウベル（熱い湯に水をさす）
- オッサマ（年輩の男子に対する敬称）
- オーブル（過重でやりきれないこと）
- オシ・オンド（君・私）
- オラブ（大声で叫ぶ）
- ガイナ（強情な、荒々しい）
- カチケル（もちなどが乾いてこちこちになる）
- コッポーモン（聞き分けのない一徹者）
- コラシイ（退屈、身体をもてあます）
- サエン（冴えない、面白くない）
- シタラシイ（湿って気持ちが悪い）
- シナ（代名詞、もの、品物）
- スメ（そば、ところ天にかけるお汁、たれ）
- セカス（おだてる、からかう）
- セグ（後から押す）
- タウ・タワン（届く・届かない）
- タカオキ（夜遅くまで起きていること）
- トガメル（傷が痛み出す・他人をなじる）
- ハズム（晴姿をする）
- ホンキ（本当）
- ヤカヤカ（わざわざ）
- ワヤニナル（物がこわれて役立たなくなる）

第2節 指定文化財

対馬の指定文化財は、国指定の重要文化財が11、特別史跡1、史跡6、名勝1、天然記念物6の計25件。県指定文化財が有形文化財26、有形民俗文化財2、史跡4、天然記念物9の計41件である。（第2-2表）

第2-2表 指定文化財一覧表

国指定文化財

(平 27.3.2)

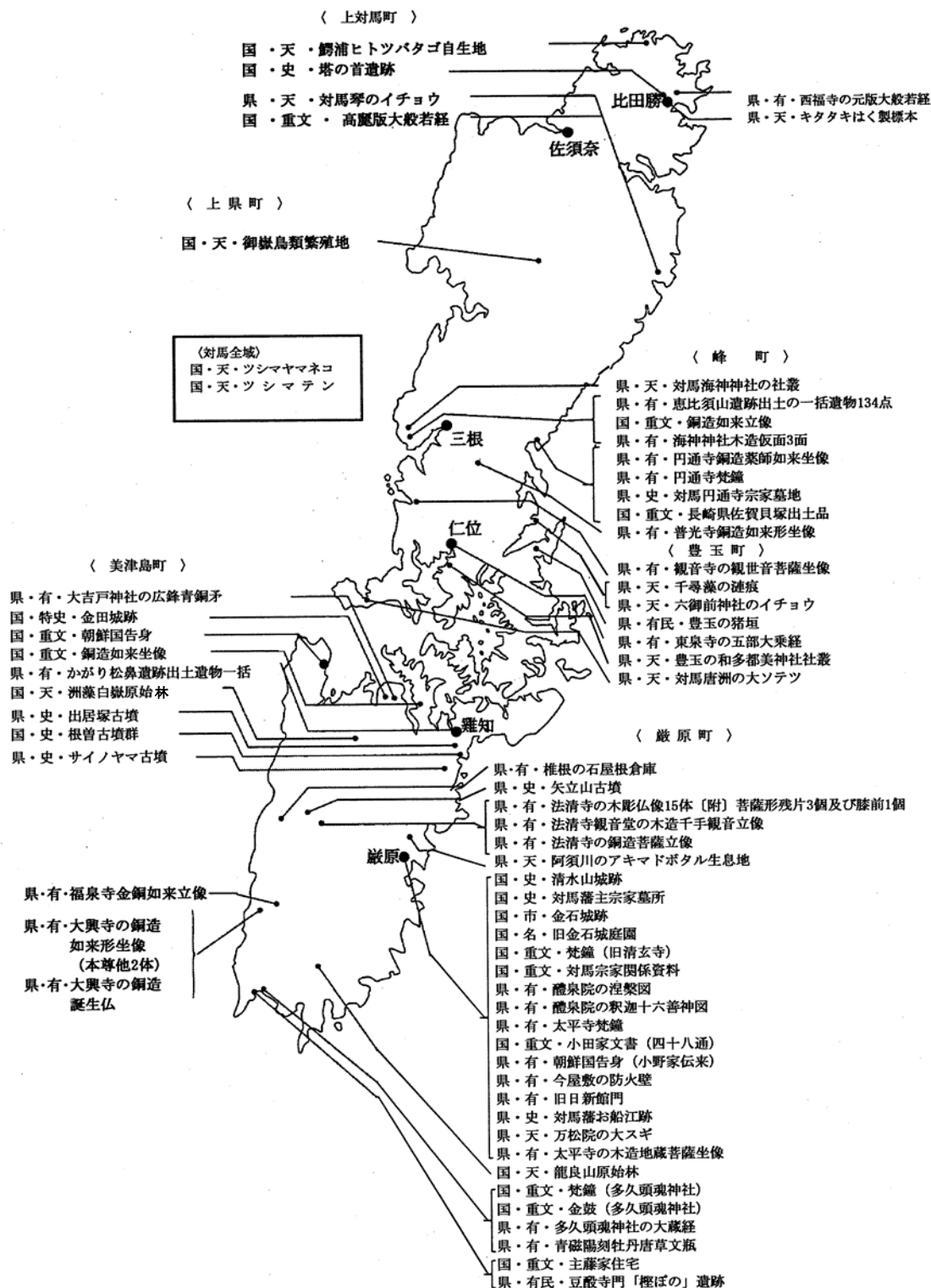
分類	名称	所在地	指定年月日
重要文化財	主藤家住宅	巖原町豆酩	昭 44.3.12
	銅造如来立像(海神社)	峰町木坂	〃 49.6.8
	朝鮮国告身	巖原町今屋敷	〃 49.6.8
	梵鐘(旧清玄寺)	〃	〃 50.6.12
	梵鐘(多久頭魂神社)	巖原町豆酩	〃 50.6.12
	金鼓(多久頭魂神社)	〃	〃 50.6.12
	銅造如来坐像(黒瀬観音堂)	美津島町黒瀬	〃 56.6.9
	高麗版大般若経(長松寺)	上対馬町琴	平 23.6.27
	対馬宗家関係資料	巖原町今屋敷	〃 24.9.6
	小田家文書(四十八通)	〃	〃 24.9.6
長崎県佐賀貝塚出土品	峰町佐賀	〃 26.8.21	
	計 11		
特別史跡	金田城跡	美津島町城山	昭 57.3.23
	計 1		
史跡	根曾古墳群	美津島町鶏知	昭 51.2.24
	矢立山古墳群	巖原町下原	〃 51.12.27
	塔の首遺跡	上対馬町古里	〃 52.2.17
	清水山城跡	巖原町西里	〃 59.12.6
	対馬藩主宗家墓所	〃	〃 60.2.18
	金石城跡	巖原町今屋敷	平 7.3.28
	計 6		
名勝	旧金石城庭園	巖原町今屋敷	平 19.2.6
	計 1		
天然記念物	洲藻白嶽原始林	美津島町洲藻	大 12.3.7
	龍良山原始林	巖原町豆酩	〃 12.3.7
	鱈浦ヒトツバタゴ自生地	上対馬町鱈浦	昭 3.1.18 平 8.6.21(追加)
	御嶽鳥類繁殖地	上県町御嶽	昭 47.6.20
	ツシマヤマネコン	対馬全域	〃 46.5.19
ツシマテン	〃	〃 46.6.28	
	計 6		
	合計 25		
[国選択]	対馬の亀卜習俗	巖原町	昭 53.12.8
	対馬美津島の盆踊	美津島町	昭 56.12.24
	対馬の釣鉤製作習俗	巖原町	昭 61.12.17
	命婦の舞	豊玉町・峰町	平 8.11.28
	対馬巖原の盆踊	巖原町	平 9.12.4
	豆酩の赤米行事	巖原町	平 14.1.18
	木坂・青海のヤクマ	峰町	平 24.3.8

県指定文化財

分類	名称	所在地	指定年月日
重要文化財	太平寺梵鐘	巖原町中村	昭 39.10.16
	旧日新館門	巖原町棧原	〃 45.10.6
	観音寺の観世音菩薩坐像	豊玉町小綱	〃 48.5.18
	法清寺の木彫仏像15体〔附〕菩薩形残片3個及び膝前1個	巖原町檜根	〃 48.5.18
	大吉戸神社の広銚青銅矛	美津島町黒瀬	〃 48.9.4

分 類	名 称	所 在 地	指 定 年 月 日
	海神神社木造仮面 3 面	峰町木坂	昭 49.7.2
	恵比須山の遺跡出土の一括遺物 134 点	〃	〃 49.9.6
	円通寺銅造薬師如来坐像	峰町佐賀	〃 50.1.7
	円通寺梵鐘	〃	〃 50.1.7
	普光寺銅造如来形坐像	峰町吉田	〃 50.3.4
	椎根の石屋根倉庫	巖原町椎根	〃 52.1.11
	醴泉院の涅槃図	巖原町今屋敷	〃 55.2.29
	醴泉院の釈迦十六善神図	〃	〃 55.2.29
	大興寺の銅造如来形坐像(本尊他2体)	巖原町久根浜	〃 55.10.24
	大興寺の銅造誕生仏	〃	〃 55.10.24
	今屋敷の防火壁	巖原町今屋敷	〃 61.1.10
	法清寺の銅造菩薩立像	巖原町檜根	〃 61.1.10
	多久頭魂神社の大蔵経	巖原町豆駈	〃 61.8.29
	西福寺の元版大般若経	上対馬町西泊	〃 61.8.29
	東泉寺の五部大乘経	豊玉町仁位	〃 63.9.30
	法清寺観音堂の木造千手観音立像一体	巖原町檜根	〃 63.9.30
	かがり松鼻遺跡出土遺物一括	美津島町鶏知	平 2.11.16
	福泉寺金銅如来立像	巖原町久根田舎	〃 5.2.24
	青磁陽刻牡丹唐草文瓶	巖原町豆駈	〃 18.3.3
	朝鮮国告身(小野家伝来)	巖原町今屋敷	〃 19.3.2
	太平寺の木造地藏菩薩坐像	巖原町中村	〃 26.10.3
	計 26		
有形民俗文化財	豊玉の猪垣	豊玉町横浦	昭 48.2.6
	豆駈寺門「檜ぼの」遺跡	巖原町豆駈	平 8.3.18
	計 2		
史 跡	対馬藩お船江跡	巖原町久田	昭 44.4.21
	対馬円通寺宗家墓地	峰町佐賀	〃 49.7.2
	出居塚古墳	美津島町鶏知	平 14.2.26
	サイノヤマ古墳	〃	〃 17.3.25
	計 4		
天然記念物	対馬琴のイチョウ	上対馬町琴	昭 36.11.24
	キタタキはく製標本	上対馬町比田勝	〃 38.3.27
	万松院の大スギ	巖原町西里	〃 41.5.26
	千尋藻の漣痕	豊玉町千尋藻	〃 41.5.26
	阿須川のアキマドボタルの生息地	巖原町阿須	〃 41.5.26
	六御前神社のイチョウ	豊玉町千尋藻	〃 47.8.15
	対馬海神神社の社叢	峰町木坂	〃 50.9.2
	豊玉の和多都美神社社叢	豊玉町仁位	〃 51.2.24
	対馬唐洲の大ソテツ	豊玉町唐洲	〃 53.3.31
	計 9		
	合計 41		

第2-1図 対馬の指定文化財所在地



指定文化財の解説

1. 国指定文化財

(1) 重要文化財

主藤^{すとう}家住宅（昭 44. 3. 12）

建築年代について、これを証する資料はないが、19世紀中頃の建築と推定されている。平面は「台所」「本座」「納戸」からなる、いわゆる三間取りで、これに一間通りの入側が表側に付き、本座の前「座敷」、台所に接する部分を「戸口」と呼んでいる。土間は狭く、かまど、流し、風呂などがある。全体に木割りが大きく、特に長方形断面の柱を見付けが大きくなるように立てるのは、この地方の特徴である。小屋は和小屋で、大梁を格子状に組み化粧屋根裏天井。屋根は、この地方の農家には珍しく、本屋根、ひさし共に本瓦葺きである。対馬地方の代表的な農家の例として、貴重な遺構である。

（巖原町豆殿）

銅造如来立像（昭 49. 6. 8）

小粒の螺^{らほつ}髪が繊細にあらわされている肉髻^{にくけい}部や地髪はほどよく盛りあがり、眉には弧を描いてタガネが入れられている。うねりのある切れ長の眼や、はっきりとした稜をつくった唇の表情など、端正な面貌である。

両肩を通した衣は、肌に沿う襞^{ひだ}がみごとに表現されていて、体部のモデリングに緊張感をあたえている。面貌^{いしゅう}や衣褶の特色から、朝鮮半島新羅統一時代の仏像であることがわかり、彼地^{かのち}にも稀な8世紀の秀作で、像高 38.2 c m の丈量は韓国小金銅仏中では大きい。

光背と台座は失われているが、本体のなめらかな肌あいほろう型による鑄造であり、背中には鑄造時の中型と外型との支えにあった部分が穴となっている。

『対州神社誌』（貞享3年）の木坂村八幡宮の条には、御神体5体のうち2体が金像であるといい、当像がそのうちの一体にあたることになる。

（峰町木坂）

朝鮮国告身（昭 49.6.8）

成化 13 年 9 月 17 日 倭人某宛 1 通

成化 18 年 3 月 日 倭人皮古三甫羅宛 1 通

弘治 16 年 3 月 日 倭人皮古面羅宛 1 通

対馬に伝来した朝鮮国の告身（官職授与状）で、対馬の中世の豪族早田氏に与えられたものである。成化 13 年（文明 9 年・1477）同 18 年（文明 14 年・1482）弘治 16 年（文亀 3 年・1503）の 3 通を伝え、わが国に現存する朝鮮国告身中、まとまった最古の遺品として珍しく、わが国と朝鮮との交渉を具体的に伝える貴重な資料である。

（美津島町尾崎）

梵鐘（旧清玄寺）（昭 50.6.12）

二匹の龍が渦巻型の宝珠を噛む竜頭の形式や四方に乳廓をつくって 4 段 4 列の笠型乳を配していることは和鐘系である。しかし、鐘身はほぼ朝鮮のデザインによっており、鐘身中央には飛天像をあしらい、下半分には撞座を竜頭の長軸線上に二個配し、撞座をはさんで、向かいあった龍が瑞雲を吐いて、海波上におどるさまを陽鑄している。

鐘身の陰刻銘文によって、応仁 3 年（1469）に、仁位の清玄寺鐘として宗盛家らの発願でつくられたことがわかり、作者は筑前芦屋金屋大工大江貞家らで、対馬に渡って鑄造したと伝えられている。江戸時代、享保 12 年（1727）には巖原万松院に移り、さらに府中の時鐘となっていた。美術工芸品としては、朝鮮鐘の様式をとり入れた日朝混淆鐘の遺例として、また史料的には、中世における宗氏の惟宗姓使用終見の銘文として貴重。総高 139.8 c m。

（巖原町今屋敷）

梵鐘（多久頭魂神社）（昭 50.6.12）

多久頭魂神社遙拝所入口の鐘楼にあり、豆殿観音堂鐘とも呼ばれてきた梵鐘である。鐘の姿はやや丈長の端正な形で、双頭式の竜頭は竜の口が笠形上の柱を噛み、竜の上の三面宝珠が火炎につつまれて配されている。袈裟けさ襷だすきも通常のもので、鐘身上帯は無文、下帯は唐草文を

鑄出している。乳区には4段4列の笠形乳をならべ、撞座は筋蓮弁を用いた八葉蓮華をかたどって竜頭の長軸方向に2個を配し、下辺の駒爪は2段につき出している。

銘文には平安時代の寛弘5年（1008）と仁平3年（1153）の二代にわたる旧鐘の改鑄につぐものであることが記され、南北朝時代、康永3年（1344）に、肥前上松浦山下庄の覚円という鑄師^{いもじ}によって製作されたことがわかる。肥前鐘とよばれる特色をそなえた鐘で、作風も優れた梵鐘である。総高98.5cm。

（巖原町豆殿）

金鼓（多久頭魂神社）（昭50.6.12）

「豆殿の大鉦」と呼ばれてきた面径77.8cmの大型の金鼓であり、朝鮮半島で製作されたものである。金鼓は日本の罽口のような梵音具であるが、両面式ではなく盤上のもので、金口とか盤子ともよばれる。側縁部に陰刻銘があり「禅源乙巳五月日 晋陽府鑄成口福寺飯子一印」と読まれ、年号が不明であるが、乙巳は高麗高宗32年（1245）と考えられ、慶尚南道の晋州で作られたものであることがわかる。その後、本邦にもたらされ、正平12年（1357）に大蔵経種によって奉懸されたことが追銘で知られる。

（巖原町豆殿）

銅造如来坐像（黒瀬観音堂）（昭56.6.9）

豊かな肉身部のふくよかなつくり、それをつつむ衣の襷^{ひだ}のモデリングの見事さなど、全身すみずみまで神経のゆきとどいた造作である。臉は微妙なカーブをつくり、眉も溝をつけて円弧を描き、やや小づくりの鼻と唇は豊かな頬をより豊かにみせている。衣は右肩をあらわにして、両手は胸の前で説法をするときの印をつくっている。火災にあって本体は変形し、台座は一部をのこしている。当像は、そのような損傷を補って余りある秀抜なできばえのもので、統一新羅時代の金銅仏中最も優秀な作品のひとつにかぞえられる。

（美津島町黒瀬）

高麗版大般若経（長松寺）（平 23.6.27）

高麗顯宗 2 年（1011）国家的事業として北宗勅版大蔵経を初めて朝鮮で開版し、その完成をみたのは文宗の時であったという。高宗 19 年（1232）この版木は、元の入寇によって焼失した。それ故にこの高麗版初雕本の経典は極めて数が少なく、壹岐安国寺にある高麗版初雕本大般若経と同様に、国の重要文化財に指定された。長松寺の大般若経は、その伝来については明確ではないが、壹岐安国寺本と同版で、全 600 巻のうち 584 巻が現存している。この経本は、朝鮮古印刷においても大変価値が高いが、わが国にもたらされた朝鮮半島の文物の渡来史を考える上で貴重な資料である。

（上対馬町琴）

対馬宗家関係資料（長崎県）（平 24.9.6）

江戸時代、対馬藩の藩庁をはじめ各機関で作成・収受・保管された諸資料類で総数 12 万点以上を数える。そのうち、対馬歴史民俗資料館で 8 万点以上を収蔵しているが、そのうち平成 24 年に 1 万 6,667 点が、平成 27 年に 3 万 5,279 点が追加指定を受けた。なかでも表書札方、奥書札方、朝鮮方等で作成された「毎日記」約 7,300 冊は、寛永 14 年（1637）以降の藩政、朝鮮貿易等の推移を概括的に伝える好史料で、他藩と比較して卓抜した質量を誇る。また、元禄 13 年（1700）に製図され、対馬全島の地形を正確に描いた「元禄対馬国絵図」、漢城（現在のソウル）から江戸まで朝鮮国王の国書を届けた朝鮮通信使を描いた「朝鮮国通信使絵巻」やその際に出された饗応料理を描いた「七五三盛付繰出順之絵図」などの絵図・絵巻類も含まれる。

（厳原町今屋敷）

小田家文書（四十八通）（長崎県）（平 24.9.6）

対馬与良郡大山村（現対馬市美津島町大山地区）の小田家に伝来した中世文書群で、少弐氏や対馬島主宗氏からの文書がほとんどである。網による漁業、塩屋での製塩など対馬の海民の様相を伝えるとともに、

高麗との交易関係などを具体的に伝える稀有な史料として、学術的価値が高い。

(厳原町今屋敷)

長崎県佐賀貝塚出土品 (平 26. 8. 21)

対馬の東海岸に所在する貝塚からの出土品。多数の骨角牙貝製品を中心とし、貝輪や釣針には未製品もみられる。また、豊富な頁岩を利用した磨製石斧の製作工程資料も充実しており、島しょ地域における縄文時代の生業活動の実態を良く示す。

(峰町佐賀)

(2) 特別史跡

金田城跡 (昭 57. 3. 23)

浅茅湾の南辺にあり、天智天皇の6年(667)11月に築造された対馬国金田城の跡である。標高276mの山頂は天然の絶壁で、それに石垣を配した遺構がある。これを起点に、尾根伝いに城壁をめぐらし、三つの谷をかかえる、いわゆる朝鮮式山城の形式をとっている。この形式は、天智4年(665)8月にできた筑前の^{おおのき}大野城、肥前の^{きのき}椽城と同一形式である。金田城は、新羅の日本進攻を防ぐ目的で築かれたものと言われる。県内で最初の国指定特別史跡である。

(美津島町城山ほか)

(3) 史跡

根曾古墳群 (昭 51. 2. 24)

対馬の中央部東海岸、鶏知浦に面した海岸台地にある古墳群で、前方後円墳3基・円墳2基からなる。山頂部の1号墳は全長30m、2号墳は全長36m、ともに対馬では珍しい前方後円墳であるが、4号墳は旧状が明確でない。ともに浜石積を特徴とし、石棺形の石室をもっている。1号墳からは、柳葉形鉄鏃・鉄刀片・碧玉製管玉が出土し、2号墳からは、須恵器・土師器・鉄剣等が発見されている。本古墳群の近くに全長40mの出居塚古墳があり、前方後方墳で4世紀後半のものと考えられ、これに後続するのが根曾古墳群で6世紀まで続く。鶏知は^{けんそうき}顕宗紀

にある下県直の根拠地と比定される場所であり、本古墳群は畿内勢力の枠組みの中に対馬が組み込まれていたことを示している。

(美津島町鶏知)

矢立山古墳群 (昭 51. 12. 27)

巖原町の西海岸、小茂田の集落に注ぐ佐須川の右岸に3基の古墳がある。1号墳は平成13年(2001)の再調査により方墳であることが判明し、2号墳も平成14年の調査の結果方墳であることが判明した。1号墳は板状の石材を三段に積み重ね、いずれの土台もほぼ正方形となっており、下段は約11m、中段は約7m、上段は約5m四方となっている。床に敷石を施した長さ4.8m幅1.8mの横穴式石室を持ち、鉄釘4本と金銅製太刀が出土した。出土した須恵器片や石室の石積み技法から、築造年代は7世紀中旬頃以前とみられている。2号墳は、平面T字形の石室を1号墳同様、割石平積みして構築しており、須恵器の長頸壺・刀装具(玄室出土)や高台付銅椀が出土した。石室構造・出土品により7世紀中旬頃の築造と考えられる。対馬では、弥生時代以来箱式石棺を主体とする積石塚が伝統的な墓制であるが、古墳時代終末期に突然横穴式石室墳が出現した。3号墳は、積石塚で長方形墳。南北が約7m、東西が約4.5mで底部を土と石で盛土し基礎を造り、その上は人頭大程の石だけで積んでいる。

(巖原町下原)

塔の首遺跡 (昭 52. 2. 17)

上対馬町比田勝港の北東、西泊湾をのぞむ低い旧岬上にある弥生後期の墓地で、箱式石棺4基からなる。銅釧(腕輪)・各種の玉類、8千個に及ぶガラス小玉・広形銅矛・法格規矩文鏡(青銅鏡)・小鉄斧等、多数の遺物が棺の内外から発見された。特に注目されるのは、第3号棺から発掘資料としては初例の広形銅矛2点があり、しかも弥生式土器および韓国陶質土器とともに発見されたことである。このことは、広形銅矛の年代が明確になったこと、韓国の土器と日本の土器の年代

比較が可能になったことを意味し、日韓文化の交流を如実に示すものとして注目される。

(上対馬町古里)

清水山城跡 (昭 59.12.6)

清水山の頂上に一ノ丸、東の尾根の先端に三ノ丸、その中間の段に二ノ丸と称する三段の曲輪があり、その間石垣が断続し全長約 500m、中世風の山城である。秀吉の朝鮮出兵に備え、天正 19 年 (1591) に築城されたもので、肥前名護屋の本営から、壱岐の勝本城、対馬の清水山城、朝鮮の釜山城と結ぶ駅城であった。標高 206m の一ノ丸は、東西約 50m、南北約 40m の長方形角円^{すみまる}で、中央に矢倉の基壇がある。東側正面には虎口^{こぐち}と櫓形があり、西側^{からめて}搦手にも門址があり、山道に通じている。

二ノ丸は、小さく矢倉がない。三ノ丸は、全形が把握し難いが、石垣^{でばり}の出張、虎口、石段が遺っている。

(巖原町西里)

対馬藩主宗家墓所 (昭 60.2.18)

清水山南麓の宗家の菩提寺である万松院 (天台宗) を中心に、山腹の宗家歴代の墓地を含む広大な地域である。万松院は、第 2 代藩主 (宗家第 20 代) 義成が、亡父^{よしとし}義智 (宗家第 19 代、対馬藩初代) を弔って建立した。元和元年 (1615) に逝去した義智のために創建した松音寺に、義智の法号である万松院をもって寺号とした。墓地は、桃山様式を残す山門のわきから、^{ひゃくがんぎ}百雁木とよばれる 132 段の自然石の大石段を登った所にある。樹齢数百年の大スギが茂り、上段には義智以来の 14 人の藩主とその正室ら、中段には室町時代の貞国 (宗家第 10 代) ほか、下段には側室などが眠る。対馬藩は十万石以上の格式であったが、壮大な墓地は数十万石の大藩並みといわれている。

(巖原町西里)

金石城跡（平 7. 3. 28）

清水山（206m）の南麓に位置し、前を清流金石川が流れる。築城年は不明であるが、『宗氏家譜』に、享禄元年（1528）宗盛治の兵乱により池の館（巖原町今屋敷）が炎上し、「盛賢（将盛）^{もりかた}府城を金石に移す」と記されている。

これより前、文明年間（1470年代）、金石の西北の山際に国分寺を再興していたので、その隣に築城したものとみられる。寛文5年（1665）国分寺を移転、城郭を拡張し、大手門に櫓を建て、多門櫓を造って金石城と称したが、天守閣はなかった。家中では金石の館と称している。

延宝6年（1678）に棧原の館が完成し、新しい府城となるが、その後も金石城は存在し、文化10年（1813）の火災で大手の櫓が焼失したときは幕府に願い出て復旧費二千両の貸与を許され、同14年にこれを再建した。

この門は大正8年（1919）まで保存されていたが、維持管理が困難となり解体された。

今も堅牢に遺る城壁の一部は、対州流の石垣の特色をよく示しており、石工技術に固有の伝統があったものとみられている。平成2年、櫓門が記録に基づき復元され、景観が往時をしのばせている。

（巖原町今屋敷）

（4）名勝

旧金石城庭園（平 19. 2. 6）

発掘された庭園遺構は全体的に保存状態が良好で、対馬藩主宗家墓所と背後の山並みを借景としている。高低差のある池の縁部に配置された大小の景石やその下方から水中に没していく玉砂利の景色は、対馬東海岸の風景を模したものと考えられ、対馬独特の風土を活かした作庭精神がうかがい知れる。

このうち、玉砂利敷きによる洲浜は奈良時代から平安時代にかけて流行した様式で、近世庭園としては希少な意匠・構造をもつ。

（巖原町今屋敷）

(5) 天然記念物

洲^す藻^{もしらたけ}白嶽原始林 (大 12.3.7)

白嶽は石英斑岩の山で、海拔 519m に達する。頂上直下の傾斜地には、アカガシ・モミ・ヒメコマツ・イスノキ・スダジイなどからなる樹林が発達している。林内にはミヤマシキミが多い。モミ・ヒメコマツ・ミヤマシキミ・カクレミノ・ナガバノコウヤボウキは、ここを分布の西限地とする日本要素である。山頂の石英斑岩の露出地には、大陸系のイワシデ・チョウセンヤマツツジ・ゲンカイツツジ・チョウセンノギクが生育する。このように日本と朝鮮半島の両要素の植物が数多く生存するところは、日本では白嶽が第一であり、植物地理学上、貴重な場所である。また白嶽山頂付近は、対馬の固有種、シマトウヒレンの唯一の産地でもある。

(美津島町洲藻)

龍^{たてらさん}良山原始林 (大 12.3.7)

龍良山は海拔 558.5m、原始林はその北側斜面に海拔 120m の低地から山頂まで広がっている。海拔 350m 付近を境に、下方にはスダジイ林、上方にはアカガシ林が発達している。スダジイ林は樹高 20m、最大幹径は 1m に達する。場所によりイスノキも多い。上方のアカガシ林は雲霧帯に発生する森林でアカガシを主木とし、ヤブツバキ・カクレミノ・ネズミモチが生育し、ミヤマシキミの低木を伴う。原始林全域の自然度は極めて高く、しかも低地から高地まで連続しているのは貴重な存在である。

(厳原町豆酏)

鱒^{わにうら}浦ヒトツバタゴ自生地 (昭 3.1.18)

(参照：第3章 自然形態)

(上対馬町鱒浦)

御^{みたけ}嶽鳥類繁殖地 (昭 47.6.20)

対馬北部の御嶽 (標高 490m) 一帯の国有林約 150ha の地域は、大正 12 年 (1923) キタタキ生息地として天然記念物に指定された。キタ

タキは既に絶滅したが、この林相は保持され好適な鳥類繁殖地として指定名称が変更された。マミジロ・サンコウチョウ・カラスバト・オオルリ・チョウセンエナガなど、多くの鳥が御嶽とその周辺樹林帯で繁殖する。わが国における、ヤイロチョウの稀な繁殖地のひとつである。また、本土では冬鳥として渡来するシロハラ・マミチヤジナイが、夏ここで繁殖することは、ワシ・タカ類も多いこととともに、極めて特徴的なことである。

(上県町御嶽)

ツシマヤマネコ (昭 46.5.19)

(参照：第3章 自然形態)

(対馬全域)

ツシマテン (昭 46.6.28)

(参照：第3章 自然形態)

(対馬全域)

2. 県指定文化財

(1) 有形文化財

太平寺梵鐘 (昭 39.10.16)

龍頭は一頭の竜が笠形上の宝珠を噛み、竜のとりつく脹らみの強い笠形は瑞雲文が飾られている。鐘身の上帯には雲文や箏^{ひちりき}や横笛などがあしらわれ、上帯に接する四方の乳廊は唐草文で埋め、内部に3段3列の蓮蕾形の乳を配していて朝鮮鐘の意匠である。乳廊相互の間には飛雲や七宝や楽器を散らしているが、鐘身面には山水風景のなかに十六羅漢のさまざまな姿が薄肉に鑄出され、飛雲飛竜を点じて一幅の絵のごとく仕上げている。

龍頭の長軸線上に配した撞座は、中房を大きく素文とした単弁八葉の蓮華文である。龍頭に添えられる筒状の旗挿と呼んでいるものを省略し、鐘身面に羅漢群像を風景とともに絵画的に鑄出するなど、朝鮮鐘の意匠を和風化したもので、鑄技も秀れ、優秀な工人たちの製作であることがわかる。

製作は、江戸時代前期と考えられる。総高 76.5 c m。

(厳原町中村)

旧日新館門 (昭 45.10.6)

もと対馬藩主宗氏の中屋敷門であったが、幕末には藩校日新館に用いられた。大門に石堀・石塁(門庭)・脇造屋が付属する。江戸末期における大名家の格式を備えた武家屋敷門の遺構としては、本県では貴重なものである。日新館は、幕末に対馬藩勤皇党の拠点であったが、内紛によりその多くが斬られ、志をのぼすことができなかつたといわれる。

なお、昭和 45 年に解体され、厳原町教委で保管されていたが、平成 5 年 3 月に移転復元された。

(厳原町棧原)

観音寺の観世音菩薩坐像 (昭 48.5.18)

やや高めの髻^{もどどり}を結び、耳に大きな耳当をつけていて、その耳後ろから垂髪^{すいはつ}は両肩にたれている。胸に大きな胸飾をつけ、膝まわりまで瓔珞^{ようらく}の飾りがまわっている。面部はふっくらとした頬におだやかな目鼻立ちであり、手は胸前にあげ、右手は軽く膝上に出して、いずれも親指と中指をまるめている。衣文^{えもん}も他像に比べて繁雑で、装飾性への志向がうかがわれる。優作であることに加えて当像が極めて貴重な存在となっているのは、像内から発見された結縁文^{けちえんぶん}に「高麗国瑞州浮石寺」「天曆三年」などの記述があることである。浮石寺は朝鮮半島忠清道瑞山郡にあった寺で、天曆 3 年は中国・元の明宗の年号で、高麗の忠肅王 17 年に相当し、西暦 1330 年にあたる。朝鮮半島の高麗の銅造仏で、製作時と安置寺院が判明する稀な例で、誠に貴重な尊像といえる。

(豊玉町小綱)

法清寺の木彫仏 15 体〔附〕菩薩形残片 3 個及び膝前 1 個 (昭 63.9.30)

法清寺は対馬南部の西海岸、元寇の激戦地として名高い小茂田浜から佐須川を少し遡ったところの檜根にある。これらの仏像は、もと下

原村鶴野の観音堂に伝えられていたものが明治21年（1888）に当寺に移されたものである。

仏像の中には体軀の大きな風貌の魁偉なものが多く、蒙古仏と呼ばれたりしていたが、いずれも本邦の平安時代の仏像である。現在、本尊千手観音立像安置の間にところ狭しと安置されているが、おだやかな作風の菩薩形立像2体、地藏菩薩立像2体のほかは、他に類例を求めにくい独特の雰囲気をもつ土着性のつよい彫像である。如来形立像、同坐像、十一面立像、地藏菩薩像あるいは梵天像や僧形文殊などをまじえ、製作は数期に分かれるようである。木彫仏15体は昭和48年5月19日に指定を受けていたが、この15体の他に仏像の破片があり、その中には一体の菩薩立像のものと確認できる3個の残片（頭部、背部根幹部、軀部右前部破片）は等身大の菩薩形立像であったことがわかる。先に指定された15体の他にも、このような秀作像があったことは、下原鶴野観音堂から法清寺に遷された諸像のことを考えるうえで貴重な存在であるといえる。9号像のものかとも思われる膝前一個も同所に伝えられているが、同像のものと確定できず、しばらくは9号像とは別個に、附けたりとしてこれらの指定文化財に含め、今後の佐須院資料とする価値が認められている。

（巖原町檜根）

おおきど 大吉戸神社の こうぼうせいどうほこ 広鋒青銅矛（昭48.9.4）

対馬の浅茅湾に北面する黒瀬城山出土と伝えられるが、詳細は不明である。長さ82.6cm～89.2cmの広形で、形式上からは弥生中期後半～後期に属する。実用を離れ、儀器化した国産品であり、弥生後期に至って、出土遺跡と出土量が爆発的に増加し、対馬島内では16遺跡76本に達する。ただし、7本一括という多量出土例は、豊玉町佐志賀黒島の15本（東京国立博物館蔵）、峰町志多賀の13本（那須加美金子神社蔵）とともに珍しい。

本資料は保存状態のよい優品であるが、埋葬施設出土ではなく、特殊な埋納状態（祭祀）からの出土と考えられている。また、対馬では

広鋒銅矛をことに必要とする祭祀性があったのか、現在の確認例は130本ほどの多きにわたっている。

(美津島町黒瀬)

海神神社木造仮面3面(昭49.7.2)

対馬国一の宮である当社では、朽破損面も含めていま9面の仮面がのこされている。そのほとんどが中世に属するもので、当社即ち木坂八幡宮での神事や祭礼、諸種の行事がしのばれる。そのうち、名称と製作年の知られるものに「火王面」があり、面裏に「奉施入対馬嶋正八幡宮御宝前、火王一面云云」「正安三年八月六日 沙弥了阿敬白」とある。正安3年(1301)の作で、眉間にしわをよせて激しい表情をみせる迫力ある彫出である。また、暦応元年(1338)の墨書銘が額裏にある鉢巻きをした仮面は、眼部裏に紙のようなものを出し入れできる衝棚を工作し、眼に変化をつける工夫は朝鮮半島との関係も考えられるという。他に、無銘であるが地方色豊かな陵王面もあり、「対州編年略」に、正安2年に当社で舞楽再興という記録がみられ、古仮面資料として貴重なものばかりである。

(峰町木坂)

恵比須山遺跡出土の一括遺物134点(昭49.9.6)

恵比須山遺跡は、三根湾に注ぐ吉田川東岸の小丘陵上にある箱式石棺群である。遺構の内外から、弥生式土器(後期前半)・陶質土器・杷頭飾はとうしよく(剣のつか飾り)・玉類など多数の遺物が出土した。弥生式土器に伴って陶質土器が出土したことにより朝鮮半島との年代の比較検討が一部可能となったことは重要であり、日韓交流の実態を示す好資料といえる。杷頭飾は、粒状造出しを多数配列し、笠頭部は中空で内部には鈴状の銅片が封入され、方柱部の裂溝より音を発する。これらの一括資料は、古代美術工芸史のうえでも高い資料価値をもっている。

(峰町木坂)

円通寺銅造薬師如来坐像（昭 50.1.7）

左手に薬壺をのせて膝上に差出し、右手は胸前にして親指と中指を捻じて結跏趺坐する薬師如来像である。ほどよい大きさの丸みのある螺髪^{らほつ}が、なだらかに盛り上がる頭部に並べられている。衣は襟首^{えりくび}を大きくあけて胸前を開き、腹部の高い位置に裙^もとその結び紐がみえる。全体的に襷^{ひだ}は簡素にととのえられ、膝前の衣文も概念的になっていて、像底地付部は幅をもたせて膝まわりに裳裾^{もすそ}をはわせている。やや赤味のある鍍金もよくのこり、損傷の少ない保存のよい像といえる。鑄造は土型による一鑄で、光背は失われ、台座は後補の木製となっている。

朝鮮半島高麗時代後半の製作によるものと思われ、この種の像で薬師如来像は対馬、壱岐、北部九州では唯一であり、韓国にも薬師仏は少なく、完好な作柄とともに貴重な存在といえよう。

（峰町佐賀）

円通寺梵鐘（昭 50.1.7）

鐘の釣手は魁偉な竜が二匹、笠形を掴んで珠を嚙む形である。鐘身はほぼ2段に区分されてデザインされ、下辺縁廻りは八葉に波打っている。

全体的な形は中国鐘のものであり、装飾は朝鮮鐘の意匠でデザインした梵鐘で、中国鐘の強い影響下に成立した李朝初期ころの製作と考えられる。

笠形の縁には宝珠を入れた装飾花卉帯をめぐらし、四方の乳廊は雲唐草でくくる。一廊に3段3列の蓮蕾乳を配し、乳廊相互の間に菩薩4体を陽鑄し、上段下辺に牡丹唐草文帯をめぐらしている。鐘身中央に子持3条紐をまわし、下段には四天王立像と珠文に囲まれた複合花卉の円形撞座を交互に陽鑄し、その上に渦上唐草文帯、下に海波文帯をめぐらしている。そして下帯の下に、下縁波状の八葉^{えぐ}剝りに対応する間に八卦文が配されているのもみえる。

（峰町佐賀）

普光寺銅造如来形坐像（昭 50. 3. 4）

対馬、壱岐などに所在するこの種の銅像仏のなかでも、頭部の尖った形や顔の表情などに特色がみられる。即ち、頭部は地髪、肉髻の区別なく円錐形状をなし、面部も額からつづけて鼻稜を平らに作り、頬の肉どりも簡素で、のっぺりとした表情となっている。眼は一文字にまなじりをあげ、高麗仏特有のどこかほんのりとしたものは少ない。両肩を被う衣のU字形にあけた胸前もやや狭く、右手をあげ左手は膝上にさしのべて、両手とも第1・3指をまるめた印を結んで結跏趺坐している。その膝上に両袖や腹前あたりから垂れる薄い縮れたような衣褶は特徴的である。このような特色は、ラマ教の仏像の影響をうけたと考えられるが、高麗中期から末期にかけて、朝鮮半島は政治的に中国、元の掣肘を受け、文化的にも元のラマ教の影響下にあったことの反映とも考えられる。

（峰町吉田）

椎根の石屋根倉庫（昭 52. 1. 11）

石屋根倉庫は、この地方独特のもので、米・麦及び雑穀・衣類・什物と、それぞれ格納する部分が、内部で区画されている。床は高床式となっており、物品の貯蔵に適する。長方形断面の主柱を平に立てるのは、この地方の特徴の一つで、見込 12 c m に対し見付 46 c m 平均である。屋根材は特徴のある大型厚石板で、島山石と称する砂岩を使用している。石屋根とした理由は、農民に瓦葺が認められなかった、食料や貴重品を火災から護る、強風による倒壊を防止するなどが考えられる。母屋から著しく離して建てるのも防火上の配慮からである。指定の石屋根倉庫は、大正 15 年（1926）完工であるが、他が次第に改造あるいは解体されていくなかで古制をよく遺し伝えたものとして貴重である。

（厳原町椎根）

醴泉院の涅槃図（昭 55. 2. 29）

画面中央に、8本の沙羅双樹の下、北を枕に右手の臂を曲げ横臥す

る釈迦。まわりに悲歎にくれる菩薩や羅漢、更に下部には、やはり悲歎の様子を示す鳥獣が描かれている。左上部からは、仏母摩耶夫人が飛来している。摩耶夫人の飛来は右上方からの例が多いが、図様は通有の涅槃図からはずれるところはない。釈迦の肉身は金泥で塗りつぶし、納衣のひだ、輪郭はやや太目の^{きりがね}截金によって表現。会衆の肥瘦ある墨線や彩色の濃淡による写実的表現、樹幹の丸味の表現は注目すべき特色である。

この太目の截金の使用は、室町期の特色であり、樹幹描写の写実性の指向は、桃山的な表現の予兆を示すものと捉えられる。従って、本図は箱書にみられる享祿3年（1530）頃、即ち室町末の作と考えられる。また諸描法からみて、伝世を明確にしないが、中央絵仏師の作とみられる。

（巖原町天道茂）

醴泉院の釈迦十六善神図（昭 55. 2. 29）

中央に釈迦如来、その下部左右に文珠、普賢両菩薩を従え、更にそれらの左右下部に十六善神を配した通常の十六善神図である。釈迦、両菩薩を除く他の諸神は、退色著しい。釈迦の顔面等の肉身部は金泥、輪郭は朱の鉄線描で描出され、納衣は截金の文様が施されている。菩薩の宝冠、^{ようらく}瓔珞及び諸神の甲冑には金泥盛上げの手法が用いられた跡がみられる。面相表現に宋風を示すが、鎌倉期にはみられない金泥盛上げの多用及び截金文様中に施された衣文線の独特の描法は、建武以後にみられるものである。箱書に明応7年（1498）の修復銘がみられるが、南北朝頃の作と推定される。作者は、諸描法からみて、中央絵仏師の作とみられる。

（巖原町天道茂）

大興寺の銅造如来形坐像（本尊他2体）（昭 55. 10. 24）

大興寺は対馬巖原西海岸の久根浜にあり、臨済宗南禅寺派の禅刹である。等身大のこの銅造如来坐像は目鼻立ちのはっきりとした表情

で、衣文も明快に型どりされ、背筋を立てて凛として正面をみる姿勢は堂々たるものである。

狭い額に大きな白毫穴があり、両眼のまなじりの切れは鋭く、頬肉や顎のふくらみもつよい。その偉風は、唇にうかべた表情とともに民族的なものを感じさせる。胸前を大きく広げ、胸に卍を鑄出し、僧祇支が襞をつくって胸前をクロスする。右手は親指と中指を捻じて胸前にあげ、左手は膝上に置いて降魔印を示す。膝前も両膝頭を突き出して「へ」の字形につくられ古式さをみせている。新羅末期から高麗初期の鉄仏の造形を受けたところがあり、高麗時代半ば以前の作と考えられる。対馬高麗仏中最も古く大きく、剛直な造形力も他に例をみない。当寺には、他に2体の銅造如来坐像があり、それぞれ高麗時代後期・末期の作と考えられる。像高 78.1 c m

(巖原町久根浜)

大興寺の銅造誕生仏 (昭 55.10.24)

4月8日の花祭りに甘茶をそそぐ誕生仏である。釈尊が生まれて「天上天下唯我独尊」と唱えられたという姿である。黒光りするこの誕生仏は、卵形の面相には明るい童顔があらわされ、帽子のような頭髮と大きな両耳が特徴的である。体部は円筒形ではあるが、わずかな脹らみをつくって胸腹部をあらわし、棒状に見える足も膝の前後の処理だけで見事に表現し、要を得て不自然さを感じさせない。上下する両腕も一見稚拙に見えるが、当像の主題をあらわすだけに大胆で大振りな表現は明快である。体部各所の簡略な表現のなかにみごとに若々しい肉体を捉えているのも生きた信仰の時代でこそ成し得たものであろう。少しせり出した蓮肉に立ち、半球形の台座9弁の反花が素朴に線刻されている。鑄製は台座までふくんでろう型一鑄で、製作は高麗時代前半と考えられる。

(巖原町久根浜)

今屋敷の防火壁 (昭 61.1.10)

江戸時代、府中(現巖原市街)は、しばしば大火に見舞われた。対

馬藩は種々その対策を講じたが、その一つとして天保12年(1841)以後町の各所に防火壁をつくり、その延焼を防ごうとした。これら石垣によるものは全国的に類例が乏しく、貴重である。しかし、今日これらは自然崩壊、ないし屋敷地の改造等に伴い姿を消しつつあるが、最も当時の姿を伝え、かつ天保15年(1844)正月という構築年月の陰刻の見られる本防火壁を指定した。

(巖原町今屋敷)

法清寺の銅造菩薩立像(昭61.1.10)

面長^{おもなが}のお顔には、弓なりの眉や波うつ上脛、そして静かな口もとなど古式さのなかに豊かな表情が見える。体軀^{そうしん}は瘦身で、長い大きな耳のうしろからの垂髪^{すいはつ}は、肩にそって可愛らしくかかっている。腰を少し右にひねって立ち、天衣^{てんね}も瓔珞^{ようらく}も、裳^ものひだも、体の捻りにそってゆれている。小品ながら、そのような細部にわたる配慮は心にくいほどで、金銅仏製作の最盛期に向かう時期のものであることがうなずかれる。台座も古式で、蓮肉部^{れんにくぶ}を少しせり出し、立ち上がりのつよい素弁^{かえりぼな}の反花もふっくらと蓮台をつつみ、像様のやわらかさとよく調和している。その製作は7世紀に遡り、朝鮮半島三国時代の尊像として、朝鮮半島美術史上、ひいてはわが国上代彫刻史を考える上にも貴重な金銅仏といえる。なお、鑄造はろう型によって本体と台座を一鑄。像高13.6cm、総高17.4cm

(巖原町檜根)

多久頭魂神社の大蔵経(昭61.8.29)

高麗の高宗帝は大蔵経の開版を発願し、いわゆる高麗再雕^{ちやう}大蔵経を高宗38年(1251)に完成している。我が国では、この種の大蔵経を収蔵しているところは少なく、豆叡の大蔵経は石田三成によって高野山に寄進された同種の大蔵経に次ぐものとして重要な資料であるが、大般若経の595巻が失われ、高麗より舶載された時期を明確にすることはできない。高麗再雕^{ちやうぼん}本は、本来初雕本同様卷子本であり、一紙は

1行14字詰め、23行であるが、豆駝のものは一紙を半折にして袋綴とし、版心を各紙の左端にした冊子本に仕立てられている。

(厳原町豆駝)

西福寺の元版大般若経 (昭 61. 8. 29)

この経典は、比較的多くわが国に舶載されている元の普寧寺版の大般若波羅蜜多経で、高麗の貴族によって元に注文され、室町時代高麗より対馬に渡り、宗貞茂の手によって応永 28・29年 (1421 - 22) ごろ西福寺に施入されたものと考えられている。この経典は、中国・朝鮮と対馬との文化交流を具体的に示すものとして、貴重な資料であるとともに室町時代における数少ない宗氏の施入記のある遺品として、その価値は高い。巻末の墨書施入記は、次のとおり。

對馬州豊崎郡西泊富嶽山西福寺常住

檀越 宗刑部少輔貞茂

勸進僧 宗益 住持比丘 慶珣 安置之

(上対馬町西泊)

法清寺の千手観音像 (昭 63. 9. 30)

対馬六観音のひとつで、もと大字下原にあった佐須院伝来の千手観音像であり、対馬六観音のうち平安時代に遡る唯一の像である。昭和 58年 5月 18日に法清寺木彫仏像 15体が指定されたが、本尊の千手観音像は未指定であった。下原の鶴野観音堂から法清寺に遷された諸像は、明治 41年の『法清寺千手観音堂宝物目録』によると、当堂にはもと 22体の像が納められていたが、現存するのは 16体であると記されている。残る 6体については、明治 23年 (1890) に第三回東京勸業博覧会に 2体出品、同 31年に対馬警備隊に 2体貸与、そして永平寺に 1体、宮内庁に 1体献納のことが記録で知られる。

(厳原町檜根)

東泉寺の五部大乘経 (昭 63. 9. 30)

中国元朝の世祖フビライ (在位 1260 - 1294) が、当時の燕京 (北京) の弘法寺で作らせたものとされる木版刷りの大方広けごんきょう華嚴経で、

則天武後の時代 695 年から 699 年にかけて、ホータン国の僧^{シフサーナンダ}実又難陀（652 - 701）によって漢訳されたいわゆる新訳華嚴経（80 巻本）。墨書奥書の洪武 27 年（1394）、建文 3 年（1401）はこの華嚴経が 14 世紀以前の中国版であることを示し、また経典の巻首、巻尾に記されている千字文^{ちっ}帙号が、同版の目録とみなされる『至元法宝勘同総録』（至元 22 年、1285）の帙号、臣、伏、戎、羌、遐、邇、壹、體ともに符合する。また版式も每版 42 行、1 行 17 字、7 折して一面 6 行で、至元 2 年版と一致する。弘法寺で木版経典を作ったとの目録は残っていても、経典はどこにも現存しないといわれていただけに、その遺品の可能性がきわめて高い本経の存在は貴重である。縦 28.2 c m、横 11.2 c m で白手楮紙の折本帖で、全 80 巻のうち第 11、25、63 巻を欠いている。

（豊玉町仁位）

かがり松鼻遺跡出土遺物一括（平 2.11.16）

対馬のほぼ中央部東側に位置する久須保浦に突き出た小さな岬の上に築かれた 1 基の箱式石棺からの出土遺物で、弥生時代後期前半のものであると考えられる。石棺は自然崩壊によって大きく原型が損なわれていたが、内径 150 c m × 40 c m の棺内に変形細形銅剣 1 点、剣把頭飾 1 点、ガラス玉 1,195 個、弥生土器 3 点が副葬されていた。この内、剣把頭飾は中国の戦国から前漢時代に作られたもので、日本や朝鮮半島で他に例を見ない貴重なものである。また、細形銅剣は朝鮮半島製、ガラス玉は日本製と推定されるなど、個々の考古資料の価値はもとより、当事における我が国と中国、朝鮮半島との交流を考えるうえからも極めて貴重な資料である。

（美津島町鶏知）

福泉寺金銅如来立像（平 5.2.24）

朝鮮半島から請求された銅造の如来像で、衣文^{えもん}の形式や台座の華麗な装飾などから、製作は統一新羅時代盛期を過ぎた 8 世紀後半以降と思われる。統一新羅時代では像高 30 c m に近い尊像は少なく、光背は

失っているものの、火災に遭うこともなく伝えられている。香煙で黒ずんでいるが、その下には、全身に良質な鍍金が施されており、対馬などに請来された朝鮮半島の金銅仏で、これほど良好な形を保っているものは少ない。

(厳原町久根田舎)

青磁陽刻牡丹唐草文瓶 (平 18.3.2)

14世紀前半の中国・元王朝の時代に製作された青磁の花瓶である。瓶の口部には10本の陰刻の圏線が描かれている。首部の三方面には牡丹の花文様が貼り付けられ、胴部の六方面にはさらに大きな牡丹の文様を配し、それらを唐草文様でつないでいる。胴部から底部にかけては29弁の^{しのぎ}鎬蓮弁文が配されている。底部の高台内は、深さ約2.3cmほどのくぼみになっている。

イギリス・ロンドンの財団に泰定4年(1327)銘の類品が所蔵されており、本作品もこの頃に製作されたものと考えられる。また、^{すきうるし}透漆を施した杉箱に収められており、その蓋の表面に墨書があり、「花瓶往昔時豆殿村 観音堂靈寶 箱紛失故新造附以 奉祈長久畢 寶永六年(1709)歳次 己丑三月吉辰 施主 高壽院」と記されている。元時代特有の青磁のオリーブ・グリーンの美しさや保存状態の良さ、迫力ある造形等、大陸との交流を示す貴重な資料である。

(厳原町豆殿)

朝鮮国告身(小野家伝来) (平 19.3.2)

告身は、朝鮮王朝が官職を授ける際に発行した辞令である。はじめは倭寇の懐柔策として、投降者へ与えていたが、やがて日本に居住している者にも朝鮮へ功があった者に与えるようになった。受職人は、年1回、朝鮮国王のもとへ親朝することが義務付けられていたが、これは15世紀中頃に日本人の通交が制限されて以降、歳遣船定約(朝鮮への年間派遣船数のとりきめ)と並ぶ通交権であった。1471年成立の『海東諸国紀』によれば、対馬17人、壱岐4人、筑前5人が受職している。現在、所在の判明している告身は9通あり、うち7通が対馬に

ある。対馬に伝存する告身は、中近世の日朝関係に重要な役割を果たした対馬ならではの貴重な遺品であり、小野家伝来の告身については、文禄・慶長の役の研究にとっても重要な史料である。

(厳原町今屋敷)

(2) 有形民俗文化財

豊玉の猪垣^{いがき} (昭 48.2.6)

豊玉町塩浜の西南の尾根に、東西約 240m にわたり、高さ 1.1m、幅 0.6m、下幅 1.2m の石垣が築いてある。対馬全島に類例がない。元禄の猪狩りは、対馬藩政史上画期的な事業であったが、その遺構ともいう。ほかに山城説、齋垣説^{いがき}また近代の牧柵とする説もある。ただ西彼杵半島や五島各地に現存する猪垣に、構造がよく似ていること、ししがきは一般的に鹿垣と書き、猪のみが対象でないことなど、村の共同防災用・狩猟用も加え、まだ考察の余地が多い。

(豊玉町横浦ほか)

豆殿寺門「檜ぼの」遺跡 (平 8.3.18)

檜ぼのとは、人々が食料とする檜の実を貯蔵した穴のことで、豆殿湾に注ぐ神田川の支流、権現川の上流右岸に、3群 18基のピット遺構がある。この辺りは、通称寺門と呼ばれ、一部は多久頭魂神社の東側社域に含まれている。背後には照葉樹林に覆われた対馬の名峰龍良山^{たてら} (559m)、木櫛山^{もっこく} (515m) を控え一年中安定した流水がある。ピットは、円形、長(正)方形さまざまであるが、大きなものでは直径 260cm ほどの円形状のもの、あるいは 180cm × 200cm の長方形のものがある。深さは土砂の堆積により確定はできないが、ほぼ 150cm 内外と推定される。側壁の多くは板石が積まれ、なかには底で流路の通じているものもある。各群のピットに共通していることは、山際に造られていることで、さらに穴の底面は、川底より低く掘られているのも共通している。これは、川と山から水を安定して供給するための工夫と考えられる。

江戸時代宝暦 8 年 (1758) 12 月御郡奉行より出された「肝煎 (きも

いり) 血判頭百姓之差図方並心得」に、「(前略) 或は孝行芋の切り干、かしの実の水生け、干菜(略) ありあう時節になるだけ貯え置き(後略)」とみえ、『楽郊紀聞』(中川延良編、安政7年)にも、「櫛の実家別拾ふて、^{ちよちく}儲蓄とす。川縁にほなを作りて蔵め置く也」とみえ、櫛の実が人々の重要な食料であったことがうかがえる。

(厳原町豆殿)

(3) 史跡

対馬藩お船江跡^{ふなえ} (昭 44. 4. 21)

厳原港の南、久田浦に注ぐ久田川河口に構築された人口の入江に4基の突堤と、5つの^{せんきよ}船渠がある。対馬藩のお船江跡である。寛文3年(1663)の築造で、築堤の石積みは当時の原形を保ち、往時の壮大な規模を窺うことができる。江戸時代、水辺の各藩はいずれも藩船を格納する施設を設けていたが、これほど原状をよく遺存している所は、他には例がない。

(厳原町久田)

対馬円通寺宗家墓地 (昭 49. 7. 2)

対馬東岸の良港^{さか}佐賀浦は、室町時代前期を通じて島府が置かれ、島主宗氏はこの地において全島を支配した。佐賀三代といわれる宗貞茂(応永)、宗貞盛(応永～享徳)、宗成^{しげもと}職(享徳～応仁)を経て、宗貞国が応仁2年(1468)府中(厳原)に移るまでの間、円通寺は宗氏の菩提寺であった。円通寺の裏山に数基の^{ほうきょういんとう}宝篋印塔があるが、個々の墓についての所伝はない。円通寺の寺号は、貞盛の法号である。中世の由緒ある墓地として、対馬の歴史を知るうえで貴重な遺跡である。

(峰町佐賀)

出居塚古墳^{でいづか} (平 14. 2. 26)

美津島町鶏知浦の西方に「エビスガクマ」と呼ばれる峰があり、その頂上にある塚は古くから出居塚と呼ばれていた。本古墳は全長40mで、構築時期は出土した^{どうぞく}銅鏃や^{くだだま}管玉等から4世紀後半から末頃と推定される。文字通り対馬で最大・最古の古墳であり、県内唯一の前方後

方墳である。内部構造は盗掘されているが、竪穴式石室と考えられる本古墳の東方にある根曾古墳群（5～6世紀）を含め、大和政権下の対馬下県直などの豪族を埋葬したものと考えられる。

（美津島町鶏知）

サイノヤマ古墳（平 17.3.25）

昭和23年（1948）に、東亜考古学会が、墳丘測量、石室構造及び墳丘内部の発掘調査を実施している。当時は「円墳」として認知されていたが、平成15年（2003）2月に、福岡大学人文学部考古研究室による墳丘の測量調査を実施した結果、段築をもった古墳時代終末期の「方墳」である可能性が高いと判明した。内部は、南東方向に開口し袖石のない横穴式石室である。北東500mの位置には出居塚古墳（県指定）、鶏知浦を隔てた子ソ崎には根曾古墳群（国指定）と、畿内系の高塚古墳が点在する。この地は、畿内大和政権の支配下に属した「対馬下県直」の根拠地があったと考えられる。築造年代は7世紀前半に比定される。石室内部は盗掘にあっているものの、墳丘及び石室内部の状態は良好で第一級の資料である。

（美津島町鶏知）

（4）天然記念物

対馬琴のイチョウ（昭 36.11.24）

琴は、対馬北部の東海岸にある。このイチョウは、長松寺の境内にそびえる雄株で、昔から対馬全島によく知られていた。幹のまわりは14.2m、樹高およそ40mで、全国有数のイチョウの巨樹である。記録によると寛政10年（1798）、落雷のため樹幹が裂け、火災が起こって幹に空洞ができた。空洞内部は、火災で焼けたあとが黒く残っているが、樹勢はよい。

（上対馬町琴）

キタタキはく製標本（昭 38.3.27）

大正9年（1920）対馬全島にわたって、キタタキ生息調査が行われ、御嶽で雌雄一対が採集された。これに基づき大正12年（1923）御嶽が

キタタキの生息地として、国の天然記念物に指定された。昭和 37 年（1962）の調査では、その生息を確かめることが出来なかった。以来、対馬では生息が確認されていない。上対馬歴史民俗資料室に保管されているはく製（雄）は、明治 35 年（1902）厳原の平田駒太郎氏が御嶽で採集したものである。これはかつて御嶽にキタタキが生息していたことを示す唯一の標本で、学術的に極めて重要である。キタタキは、現在韓国京畿道の一部に少数が生息しているにすぎない。

（上対馬町比田勝）

^{ばんしょういん}万松院の大スギ（昭 41. 5. 26）

万松院は対馬藩宗家の菩提寺で、対馬藩主宗家墓所として国指定の史跡である。以前は、この墓地内や長い参道の石段の左右に 20 本ばかりのスギがあったが台風などで倒れ、現在は 3 本を残すのみとなった。この 3 本は、それぞれ目通り幹まわりが 5.2m・6.2m・7m である。

（厳原町西里）

^{ちるも}千尋藻の^{れんこん}漣痕（昭 41. 5. 26）

対馬は、全島ほとんどが泥質の第三紀層よりなり一括して対州層群とよばれている。地層は主として厚い^{けつがん}頁岩か頁岩・砂岩の互層である。頁岩に挟まれる砂岩の上面や下面に、堆積作用のあらわれとして、水流や水の動揺の痕跡を留めているところが多い。上面の波状の起伏は漣痕であり、下面には水流の流れによって泥がかきとられた跡を埋めた砂の型が底痕として残される。千尋藻の漣痕は、昭和 27 年の台風時に崖くずれによって、地層面が露出したために現れたもので、対馬では比較的発見例は多いが、この漣痕が規模も大きく見事である。

（豊玉町千尋藻）

阿須川のアキマドボタル生息地（昭 41. 5. 26）

アキマドボタルは中国・朝鮮半島・済州島に分布し、日本では対馬のみに生息する。雄は体長 20mm ぐらい。胸部背面は黄褐色で、窓のような大きなスカシをもち、翅は黒い。成虫は、9 月下旬から 10 月に出現するので、この名がある。雌は体長 26mm ぐらいで、うすく赤味

のある白色幼虫型。翅は痕跡的で飛べない。草むらなどをはいまわり、光を点滅するので、その所在を知りうる。幼虫は陸生で、ウスカワマイマイなどの陸生貝類を食べる。阿須川流域のほか、厳原町佐須川・美津島町洲藻川流域にも、少数生息している。

(厳原町阿須)

むつのごぜん
六御前神社のイチョウ (昭 47. 8. 15)

六御前神社は、対馬中部の東海岸の集落千尋藻^{ちろも}にある。このイチョウは、神社の境内にそびえる雌株で、目通り幹まわり 6.4m、高さ約 32m、四方に枝を出し、枝張りは東西 24.0m、南北 26.0m、壮年期のイチョウ特有の美しい樹形である。また、十数個の小さな乳柱もみられる。

(豊玉町千尋藻)

対馬海神神社の社叢 (昭 50. 9. 2)

この社叢は、対馬上島の西海岸近くの丘陵斜面にある。スダジイとウラジロガシを主木とし、クロマツやケヤキ、ヤマハゼをも混じえる。林下にはホソバカナワラビが密生し、アリドウシ・テイカカズラ・ベニシダ・ヤブコウジなどの常緑植物が生息している。大陸系のノグルミやコバノチョウセンエノキもみられる。社叢は全体として対馬西海岸の丘陵地をかつておおっていた照葉樹林の原型を、今によく残していて貴重である。

(峰町木坂)

豊玉の和多都美^{わたつみ}神社社叢 (昭 51. 2. 24)

この社叢は、対馬の上島と下島に囲まれた浅茅湾奥の波静かな入江に面して位置する和多都美神社の周辺に広がる。主木は、スダジイ・ウラジロガシの照葉樹のほか、アズキナシ・ケヤキ・ハリギリ・イロハモミジなどの落葉樹を若干まじえる。林床にはコバノカナワラビ・テイカカズラ・ビナンカズラ・ベニシダが繁茂する。林縁にはヤマボウシ・ハナイカダ・ウリノキが生え、大陸系のオオチョウジガマズミやケイリンギボウシを見出される。社叢は全体として、対馬中部の低

海拔丘陵地の原形をよく残しているばかりでなく、高地性の落葉樹や大陸系植物がごく海浜近くに生じていて貴重である。

(豊玉町仁位)

対馬^{からす}唐洲の大ソテツ (昭 53. 3. 31)

唐洲は、対馬中部西海岸の唐洲湾に臨んだ集落である。このソテツは、対馬の名木として琴の大イチョウとともに、昔から全島に広く知られている。大小の幹枝が入り乱れ、東西 7m、南北 5.3mに広がっている。主幹と思われるものの高さは 3.5mで、高さの割に枝張りが大きく樹形も整って姿もよい。ソテツの珍しい巨樹である。

(豊玉町唐洲)